

News Letter

■ 特集記事 1

日本演劇研究コース：
日英近松劇上演プロジェクト
湯浅版「今宮の心中」

■ 特集記事 2

芸術文化環境研究コース：
公演「みっつのうたでドントカ」
シンポジウム「すべての人のための舞台芸術とは」

■ 特集記事 3

舞踊研究コース：
「ダンス研究への招待・『春の祭典』再考」

■ 活動報告

- 芸術文化環境研究コース P4
- 日本演劇研究コース P5
- 映像研究コース P6
- 西洋演劇研究コース P7
- 東洋演劇研究コース P7
- 舞踊研究コース P8

■ 新刊紹介・イベントカレンダー P8

編集後記

演劇・映像の国際的教育研究拠点



特集記事 ① 報告

日本演劇研究コース： 日英近松劇上演プロジェクト 湯浅版「今宮の心中」

2008年6月5日(木)19時・6日(金)14時 早稲田大学小野記念講堂

6月5日、6日の両日、早稲田大学小野記念講堂において、イギリス国立ハル大学近松シアターカンパニーによる湯浅版「今宮の心中」(Lovers' Suicides at Imamiya)を上演した。同公演は、イギリス国立ハル大学、大阪市立大学、そして早稲田大学(演劇博物館グローバルCOEプログラム)の三大大学が主催する「日英近松劇上演プロジェクト」の一環として行われ、今回の東京公演の他、ハル(ハル大学ドナルド・ロイ劇場、3月5～8日)、大阪(精華小劇場、5月30・31日)、エディンバラ(国際演劇祭、8月18～23日)の日英四都市を巡業する。

「日英近松劇上演プロジェクト」とは、今回の公演のプロデューサーであり、翻訳・演出も務めた湯浅雅子氏(ハル大学特別名誉研究員)が立ち上げた、全編英語・全キャストイギリス人による近松劇の上演で、2004年の「女殺油地獄」に始まった(イギリスのみで上演)。演劇博物館においては21世紀COEプログラムの事業として、2006年4月に第二回公演「堀川波鼓」を上演した実績がある。第三回公演となった今回は、近松の作品群の中から心中物として「今宮の心中」を取り上げ、第二回公演同様、ハル大学演劇学科の学生によって上演された。イギリスの若者にとって、作品を織り成す近世の大坂文化を理解し、着物の所作を身に付けることには大きな苦労があったと思われるが、その困難を忘れさせる1時間30分にわたる熱演は観客を近松の世界へと誘い、観客も彼らに惜しみない拍手をおくった。

ことの意義」では、近松の翻訳劇が完成するまでの経緯と苦心が紹介された。続くシンポジウム「日本の近松から世界のCHIKAMATSUへ」では、湯浅、キース・ピーコック(ハル大学教授)、鳥越文蔵(元演劇博物館館長)、竹本幹夫(演劇博物館館長・グローバルCOE拠点リーダー)の各氏が議論を展開させた。近松劇については英訳と海外上演の歴史、また現代語訳の際の諸問題などが話し合われ、さらに英国における翻訳劇の上演史や、近年のシェイクスピア劇の受容など、多岐にわたる話題が取り上げられた。最後には活発な質疑が展開され、1時間30分の関連イベントは大いに盛り上がった。

「日英近松劇上演プロジェクト」の目的は、近松劇を英語圏の人々に紹介し、シェイクスピアやチェーホフの作品のように世界演劇のレパートリーに入れ込むことにあるが、日本の観客にとっては外国を経由した近松劇に触れることで、作品のテーマや芝居を構成する様々な要素をいつもとは異なった角度からみる好機となった。また従来、古典芸能の翻訳を上演する機会がほとんどないことから、その可能性と諸問題を浮き彫りにしようとした有意義な試みであったといえよう。

(客員研究助手 埋忠美沙)



6日は公演に引き続き関連イベントとして、講演とシンポジウムを開催した。湯浅氏の講演「日本古典演劇を英語で演じる



写真撮影：坂内太(事業推進担当者)

芸術文化環境研究コース：

公演「みっつのうたでドドントカ」 明治安田生命社会貢献プログラム
「エイブルアート・オンステージ」参加事業

シンポジウム「すべての人のための舞台芸術とは」

2008年5月11日(日) 早稲田大学 小野記念講堂

市民の芸術運動と民間企業の支援により2004年から実施されている「エイブルアート・オンステージ」は、障害のある人が参加する舞台表現活動プログラムであり、数々の隠れた才能を発見して開花させる機会をつくり、芸術表現の新しい可能性を開拓してきた。2007年度参加事業「みっつのうたでドドントカ」は、作曲家鶴見幸代氏と振付家山田珠実氏が知的な障害をもつ人たちと音楽やダンスのワークショップを重ねてつくった「家族」「仕事」「性」をテーマにした作品である。芸術文化環境研究コースでは、関係各部署の協力を得て本学内での公演を実現するとともに、社会における芸術の生産と受容過程の民主化を考えるシンポジウムを併せて開催し、新しい舞台芸術活動の実践を文化政策研究の文脈に置いて検討する機会を設けた。この催しは100名を超える入場者を迎えて行われた。



拠点リーダー、演劇博物館館長竹本幹夫教授が総司会を務めたシンポジウムでは、「生きるための芸術『エイブルアート・オンステージ』からの報告」と題された播磨靖夫氏（エイブル・アート・ジャパン常務理事）による基調講演に続き、山田珠実氏（振付家/みっつのうたプロジェクト実行委員会）、伊藤裕夫氏（富山大学芸術文化学部教授、早稲田大学演劇博物館GCOEプログラム芸術文化環境研究コース客員講師）がそれぞれの立場からコメントを加えられた。

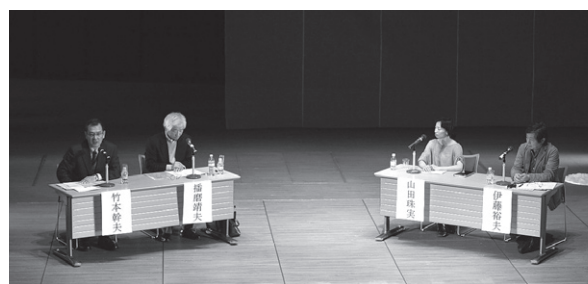
播磨氏の基調講演では、35年にわたり障害者の芸術活動に取り組みながら向かい合ってきた「人として良く生きるために、なぜ芸術や文化が重要なのか」という問いが、美術や音楽分野を含む活動を経て、障害のある人の芸術活動を「可能性の芸術」としてとらえるエイブルアート・ムーブメントへ、さらに「演劇的な知を社会化する」エイブルアート・オンステージ事業へと結実した歴史が、社会背景を踏まえながら語られた。舞台芸術との出会いによって参加者の五感が解放され、自己と他者への理解が深まり、コミュニケーション能力の高まりが生まれてくる。この活動では、すべての人が芸術を自分との関わりの中で実感できるものにするために、芸術概念そのものを捉え直していくことが重要な課題であった。

続いて山田氏が、舞台実現の過程、知的障害を持つ人の魅力、創作と参加者との交流によって得た体験の三点について鮮明な言葉で語られた。その発言は、観客として作品を体験したばかりのシンポジウム参加者にとって、創造プロセスを身近に共有させてくれるものであり、舞台芸術の創造に関わった参加者に起こる変化の過程に芸術家が果たす役割を明らかに示してくれた。

伊藤氏は文化政策研究の立場から、「可能性の芸術」の思想と海外の公共文化政策の潮流の間にある共通点を指摘され、その上で1970年代ドイツにおける“Art for all”を参照例として紹介された。日常生活に存在するさまざまな文化も含めて再定義した文化を社会の中に取り戻し、すべての人が自分自身で関わる形で芸術文化との接点を持つことのできる社会の実現を目指した文化政策理念の登場は、その後の社会制度に影響を与えた。また伊藤氏は、芸術家が多様な感受性をもつ人びとの抑圧された感覚を解放していくメディアあるいは仲介者となる側面を持つことにも触れられ、その能力が持続的に発展し生かされる仕組みをつくることの重要性を論じられた。

シンポジウムでは「可能性の芸術」が障害のある人だけでなく、現代社会に生きるすべての人間に関わる概念である点が指摘された。公共政策としての文化政策の策定には、文化概念の検討とともに、社会が作り上げてきた既存の芸術文化に関する制度の意味についての根本的な問い直しも重要となる。芸術文化環境研究コースでは、今後も各国の文化政策、芸術文化を支える制度について、さまざまな角度から研究を行っていく。

(客員研究助手 長嶋由紀子)



特集記事 ③

舞踊研究コース：
「ダンス研究への招待・『春の祭典』再考」

2008年1月29日(火)・30日(水)

GCOE舞踊研究コースは、英国における舞踊研究の第一人者であるサリー大学名誉教授のジャネット・ランズデール氏を招聘し、1月29日、30日に「ダンス研究への招待・『春の祭典』再考」と題する国際研究集会を開催した。29日にはランズデール氏による講演。30日には同じくランズデール氏の基調講演の後、「ニジンスキー振付『春の祭典』再考」と題するシンポジウムを開催した。紙面の都合上、ランズデール氏の講演については別の機会に触れることとし、ここでは『春の祭典』をめぐるシンポジウムの内容を報告する。

20世紀舞踊の出発点となったディアギレフのバレエ・リュスは2009年に100周年を迎える。その意味では、われわれのシンポジウムは100周年に際して全世界で予定されているさまざまな催事の魁となるものだった。

21年間(1909-29)に及ぶそのバレエ・リュスの全活動を通じて、ニジンスキー『春の祭典』は大きな転換点であった。それはさらに広い文脈において、『春の祭典』のモードリス・エプスタインズが強調するように、モダニズムの誕生を告げる歴史的事件でもあったといえる。

まず司会を兼ねて、鈴木晶が、『春の祭典』をめぐる基本的事実を再確認した上で、舞踊史におけるこの作品の位置づけについて論じた。ニジンスキー振付による『春の祭典』は、ニジンスキーがバレエ・リュスを解雇されたために9回しか上演されることがなかったが、「20世紀音楽の最高傑作」と言われることすらあるストラヴィンスキーの音楽は、それ以後今日に至るまで100年近くにわたって、振付家たちの創作意欲を駆り立ててきた。この曲に挑戦し、独自の振付作品を発表した振付家たちには、ごく代表的な人たちに限っても、レオニード・マシーン(1920)、マリー・ヴィグマン(1957)、モーリス・ベジャール(1959)、ケネス・マクミラン(1962)、カサトキナ&ワシリョフ(1965)、ジョン・ノイマイヤー(1972)、ピナ・バウシュ(1975)、ポール・テイラー(1980)、マーサ・グレアム(1984)、マッツ・エック(1984)、リン・ファイ・ミン(1984)、ジャン・クリストフ・マイヨー(1985)らがいる。一方、ニジンスキーによるオリジナル振付は、ミリセント・ホドソンによって復元され、1987年にジョフリー・バレエ団によって初演された。これが原振付をどの程度忠実に復元しているのかは知るよしもないが、この復元版は現在、パリ・オペラ座バレエ、マリインスキー・バレエ、フィンランド・バレエなどのレパートリーになっている。

東京大学教授の沼野充義氏は、舞台美術を担当したニコライ・レーリッヒ(リョーリフ)が、たんに美術を担当しただけでなく、その構想段階から大きく関わっていたという事実を再確認する。ストラヴィンスキーがその自伝の中で、自分が着想したかのように語っているために、長いこと『春の祭典』の作者はストラヴィンスキーだと考えられていたが、ケネス・アーチャーらの研究によって、実際にはレーリッヒが作者であったことが明らかになっている。レーリッヒはその後バレエの世界と関わりを持つことはなく、「神秘的リアリズム」の画家として、またシャンバラ(インド内奥の桃源郷)伝説で知られる神秘思想家として、さらには美術遺産を戦争から守ることを目的とした国際レーリッヒ条約の提唱者として活躍することになるが、そうしたレーリッヒの全活動において『春の祭典』がいかなる意味をもったかについて、沼野氏は多々の示唆に富む指摘をおこなった。

早稲田大学教授の伊東一郎氏は『春の祭典』の音楽的な側面について論じた。この曲はいわゆる西洋古典音楽を真っ向から否定した作品として知られる。その不協和音、変拍子、複数リズムの併存などについては、ロシア民謡の影響がとくに指摘されるが、伊藤氏は、テーマ性を否定し、音楽的革新こそ音楽創造の根幹であるというストラヴィンスキーの音楽観がこの曲にも顕著にあらわれていることについて論じた。

筑波大学専任講師の平山素子氏は、2005年に兵庫県立芸術文化センターにおいて『春の祭典』(ホドソン復元版)が日本人の手によって初演された際、後半の主役である犠牲の処女を踊ったが、そのときの体験、とくにホドソンによる指導について語った。

以上の講演の後、講師全員によるディスカッションがおこなわれた。

先に述べたように、ディアギレフのバレエ・リュスは2009年に100周年を迎える。GCOE舞踊研究コースでは再度バレエ・リュスの今日的意義をめぐるシンポジウムをあらためて開催する予定である。

(法政大学教授・GCOE客員講師 鈴木 晶)



ジャネット・ランズデール名誉教授(サリー大学)

■ 研究会「演劇と日本近代」(演劇創造部会) 第1回 「坪内逍遙—教育とコミュニティ演劇」

講師 津野海太郎(和光大学教授)

進行 松井憲太郎(演劇評論家、学習院大学大学院講師、
早稲田大学演劇博物館グローバルCOE芸術文化環境研究コース客員講師)

2008年5月9日(金) 18:00~20:00

早稲田大学早稲田キャンパス6号館318号室



今年度の芸術文化環境研究コースは「演劇と日本近代」研究会を月1回のペースで開催している。

(1)「演劇創造部会」(2)「演劇環境部会」の二系統で構成するシリーズは、創造の主体、演劇をとりまく制度をはじめとする芸術文化環境という異なる視角から近代演劇史を分析することで、日本における演劇と社会の関係性を立体的に描こうとするものである。

このうち「演劇創造部会」では、19世紀の終わりから20世紀の前半にかけての、日本の近代演劇の草創期を代表する演劇人たちの仕事の軌跡をたどりつつ、彼らの作品に表れた「国家」や「国民」という概念や、その活動のなかで構想された「市民社会」や「個人」の確立というヴィジョンを浮かび上がらせていく。そのことを通じて、日本が“近代化”し“国民国家”へと自己変革を遂げていくなかで、新派や新劇などの「近代演劇」がどのようなかたちで「日本近代」を表象する芸術としての機能や役割を担っていったのかを探る。

初回は『滑稽な巨人・坪内逍遙の夢』(平凡社、2002年)の著者、津野海太郎氏をお招きし、「坪内逍遙—教育とコミュニティ演劇」というタイトルのもと研究会を開催した。津野氏は、通常「近代演劇」という文脈で論じられる際には触れられることの少なかった、早稲田中学を建学した教育者としての活動や、コミュニティや家庭に基盤においた演劇活動を論じていき、演劇人坪内逍遙の知られざる思想や精神に光を当てていった。「国家」や「個人」という西欧から日本の近代に接ぎ木された概念を忌避した坪内逍遙は、民衆が自律的にかたちづくる「社会」に依拠した文化活動を創出することを構想していくが、研究会では逆にその構想の挫折の道程をたどることで、逍遙が実現を夢みた民衆芸術の理想、またそれへの海外の演劇思潮からの影響、そして逍遙の思想と実践がその後の日本の演劇に与えた影響などについて考察していった。

今後も、川上音次郎、岸田國士、千田是也といった演劇人たちをとりあげ、演劇と日本近代の相關関係を考えていく予定である。

(客員講師 松井憲太郎)

日本演劇研究コース

■ 集中講義「中国演劇史(古代~中世)」

講師:黄竹三氏(山西師範大学教授) 2008年2月21日~27日 大隈記念タワー地下多目的講義室

前近代の日本演劇において中国演劇は、その形態・作品等に多くの影響を及ぼしてきたが、日本演劇研究者にとり中国演劇史、とりわけ古代から中世にかけての理解は言語の問題もあり十分とは言えない。そこで日本演劇研究コースの研究員を対象に、古代から中世にかけての中国演劇研究で多くの成果をあげている黄竹三氏に全15時間の集中講義をお願いした。

豊富な学識と中国各地の実地踏査に基づく講義は、日本演劇研究をより深化される点で非常に有意義なものであった。また多く詰めかけた中国演劇の研究者にとっては、最新の研究動向に関する考察を得る好機となり、活発な質疑応答が繰り広げられた。

(客員研究助手 埋忠美沙)

■ 鹿児島にて古浄瑠璃人形の上演会を開催

三人遣いによる義太夫節人形浄瑠璃以前の浄瑠璃採りの面影を現在に伝える、いわゆる古浄瑠璃人形(文弥人形など)は、現在、新潟県佐渡市・石川県白山市・宮崎県都城(山之口)・鹿児島県薩摩川内市(東郷)に伝承されている。早稲田大学はこれらの古浄瑠璃人形とは古くからご縁があり、21世紀COEのアーカイブ構築研究コースでも、2003年10月に大隈講堂に佐渡と東郷の文弥人形伝承者を招いて比較上演をお願いした。また2006年3月には、佐渡で公開収録を実施し、近松初期の2作品をノーカットで丸2段ずつ上演していただいた。グローバルCOEでは、日本演劇研究コースの活動の一環として、2007年3月2日に薩摩川内市東郷公民館で、東郷文弥節人形浄瑠璃保存会との共催による特別上演会が実現した。折から保存会が国の無形文化財指定の内示を受け、地元テレビの特別番組などの影響もあって、500人収容の公民館に立ち見が出るほどの盛況の中で、無事収録を行うことができた。

(事業推進担当者 和田修)

映像研究コース

活 動 報 告

■ D・W・グリフィス作品研究会

2008年5月17日(土) 15:00～17:30 戸山キャンパス31号館 310号室(第1回)

5月24日(土) 15:00～17:30 戸山キャンパス31号館 310号室(第2回)

5月17日と5月24日の二週にわたって、映像研究コースでは新規購入のD・W・グリフィス監督作品の16ミリプリントを材料にした研究会を行なった。21世紀COEのグリフィス・プロジェクトを継承して、グローバルCOEプログラムにおいても、グリフィスのバイオグラフ期の作品を収集し、アメリカ映画においてプリミティブな時期から古典的システムが形成される時期までの移行期間に何が起こったのかを、実際の映像を見ることによって検証するという作業を進めている。グローバルCOEでは、1909年から1910年のグリフィスにとっては極めて多産な2年間を集中的に研究している。1908年12月に設立されたMPPCの影響はこの2年間のグリフィスの製作活動にはっきりと現れている。アメリカ映画史においては最初の映画トラストとして否定的な側面が強調されている感のあるMPPCであるが、少なくともメイジャー系の映画製作者たちにとっては初期の段階のこのトラストは、極めて効果的にポジティブな意味をもたらし、バイオグラフ社にいたグリフィスにとっても、自由に、自分の思うがままに様々な映画の実験をすることが出来た。

グリフィスはこの時期、毎週少なくとも1本の映画を作っており、時にはいくつかの映画を平行して同時に製作するという技まで披露している。しかも、例えば映画のジャンルという面から見てみると、彼は同じジャンルの映画を連続して作るというよりも、あえて全く異なったジャンルを隣接させて発表している。例えば悲劇的物語の次に、喜劇を作る、といった具合である。17日には15本、24日には9本のいずれも1909年に製作された作品を上映し、各作品についての検討と、参加者全員による討議が行なわれた。上映の順番はクロノロジカルに、時系列に沿って行なわれたために、グリフィスが1909年にどのように作品の形式を展開させていったかが極めて明瞭にわかった。とりわけこの年の中盤以降、舞台装置が平面的な書割から、立体的なものに変わり始め、例えばドアが初期の場合画面の中央にあったのに対して、むしろ家の空間の中で角度をもって設置され始めたために、人物の出入りがショット内で立体的な動きを作り出したという指摘が参加者の中からあった。

また外国映画からの影響も、このクロノロジカルな順序の上映では明確に見て取れた。特にフランスの同時期のリアリストの映画や、イタリアの史劇映画はグリフィスによって模倣された。『奴隷』という作品における古代ローマを背景とした俳優たちの演技は、明らかに現代のアメリカを舞台とした役者の演技とは異なっており、その身振りコードは同時代のイタリアの古代ローマ劇をそのまま模倣したもののように見える。こうした模倣の実践を通じて、グリフィスは後の『イントレランス』のような映画を作ることが出来たのである。さらにグリフィス特有の<最後の瞬間の救出>、非常に興味深い照明技法なども発見され、改めてグローバルCOEにおけるグリフィス・プロジェクトの非常に大きな重要性を認識する研究会となった。

(事業推進担当者 小松弘)

活 動 報 告

■ 越前風の伝承について―「和田合戦女舞鶴」を聞く―

2008年3月24日(月) 13:00～15:00 戸山キャンパス39号館5階第6会議室

人形浄瑠璃文楽コースでは、人形浄瑠璃文楽の伝承に関する研究を基本テーマとして、伝承が途絶えている浄瑠璃の復曲に取り組んできた。その一環として、今回の研究会では、2005年3月に「酒香童子枕言葉」鬼ヶ城対面の段を復曲演奏された豊竹英大夫妻をお招きして、「和田合戦女舞鶴」市若初陣の段を取り上げ、研究会を行った。

豊竹越前少掾の東風を伝える「和田合戦女舞鶴」市若初陣の段は、十世豊竹若大夫による、昭和40年朝日座での上演以後、(東京で一度上演されたものの)実質的に久しく途絶えている。十世豊竹若大夫の孫である豊竹英大夫師は、今回の研究会を契機に、演奏への意欲を示され、その実現への期待が高まった。

(グローバルCOE研究員 金昭賢)

■ 文楽の人形―立役編―

2008年3月26日(水) 14:00～16:00 戸山キャンパス39号館6階第7会議室

人形浄瑠璃文楽コースでは、21世紀COE以来、復元的研究をテーマとして、主に浄瑠璃の復曲演奏に取り組んできた。今回は、人形浄瑠璃文楽の魅力の一つである「人形」を取り上げ、研究会を行った。お招きした人形遣い吉田玉女師と吉田玉佳氏(左遣い)・吉田玉勢氏(足遣い)により、立役人形の内部構造と遣い方の説明を交えながら、三人遣いが実演された。

特に、通常公開されることのない、主遣いによる人形の着付けや、客席からは窺い知ることのできない主遣いと足遣いの綿密な連繋などが披露された。人形遣いの高度な技による文楽人形の魅力を、再確認する有意義な時間となった。

(グローバルCOE研究員 金昭賢)



■シェイクスピア・ゼミ連続講演会

シェイクスピア・ゼミでは、月1回開かれる研究会・講演会などの活動を通して、テキスト論と上演論を結びつける方法論の確立を目指している。3月にダニエル・ガリモア氏(日本女子大学専任講師)、5月に江戸馨氏(東京シェイクスピア・カンパニー主宰)、6月に小町谷尚子氏(慶應義塾大学准教授)を講師に招き、講演会を行った。

第1回 2008年3月12日(水) 15:00-17:00

講師:ダニエル・ガリモア氏(日本女子大学専任講師)
 “‘Smelling a rat’: a corpus linguistic approach to Tsubouchi Shoyo’s *Hamlet* translations.”

ガリモア氏の講演は、坪内逍遙訳の『ハムレット』を取り上げたものであり、逍遙がシェイクスピア作品を翻訳する際にどのような工夫を行っていたのかを、言語学的な分析を通して明らかにしていくというものであった。テキストから証拠を1つ1つ具体的に提示し、逍遙のシェイクスピア作品翻訳において顕著な特徴は、歌舞伎独特の表現を用いたものであるということを示した。本講演は、日本という文化の中におけるシェイクスピアのテキストと舞台との関係を探るものであった。

第2回 2008年5月17日(土) 15:30-17:00

講師:江戸馨氏(東京シェイクスピア・カンパニー主宰)
 「“Fair is foul, and Foul is fair.” さて日本語では？」

江戸氏は、東京シェイクスピア・カンパニー主宰であり、1990年から現在までシェイクスピア作品の翻訳、上演に携わっている。今回は、その経験を基に、実践の立場から見たシェイクスピア劇上演の問題点を考察した。日本語に翻訳し、上演する際、シェイクスピア劇が前提にしているキリスト教・西洋古典の世界観を日本の観客に伝えるのに生じる問題点、それを解決するために行っている工夫を、例を示しながら論じた。講演中に東京シェイクスピア・カンパニーの役者による台本の朗読もあり、講演会は盛況だった。

第3回 2008年6月14日(土) 15:30-17:00

講師:小町谷尚子氏(慶應義塾大学准教授)
 「Sir Topaz 逸話 (*Twelfth Night*, Act 4 Scene 2) をとらえなおす—Jest-bookの流布から見るFesteの起源—」

小町谷氏の講演は、現代人が作品を理解する際の問題を扱ったものであった。シェイクスピアが作品を執筆した当時周囲にあった、笑話集などのテキストを通して作品を読むことにより、シェイクスピアの道化がきわめて英国的な伝統の中に位置づけられることを示し、現代の上演で『十二夜』の道化であるフェステとマルヴォーリオの場面が矮小化されることにより、フェステ本来の役割が見えなくなっていることを明らかにした。講演はテキストの文化的背景と上演をいかに結びつけるかを考察するものであった。

■ブレヒト連続セミナー(全5回)

講師:ヨーアヒム・ルケージーGCOE客員教授

- 第1回 4月30日(水) 16:30~18:30 国際会議場4階共同研究室4
- 第2回 5月 7日(水) 16:30~18:30 14号館801会議室
- 第3回 5月14日(水) 16:30~18:30 国際会議場4階共同研究室6
- 第4回 5月21日(水) 16:30~18:30 26号館地下多目的講義室
- 第5回 5月28日(水) 16:30~18:30 26号館地下多目的講義室

ドイツより招聘したヨーアヒム・ルケージー客員教授による「ブレヒト連続セミナー」を全5回にわたって開催した。連続セミナーの前半では、ベルトルト・ブレヒト研究においてすぐれた業績を積み重ねてこられたルケージー教授から『家庭用説教集』の詩作品(第1回)、『三文オペラ』のソング(第2回)、初期散文作品(第3回)を対象にご講演いただいた。とりわけ戯曲テキストとブレヒト自身の演出指示との関係について熱心な議論があった。またルケージー教授は、音楽学の博士号を取得していることから、音楽学的な観点からも演劇を語っていただいた。連続セミナーの後半では、日本初公開となるDVD資料により、演劇人ブレヒトを理解する試みを行った。第二次大戦の亡命生活の苦難や、戦後に帰国した後のベルリナー・アンサンブルの創設、上演史に名高い舞台などを映し出した貴重な記録映像、そしてまた血縁者や友人からは興味深いエピソードが語られた。ここではルケージー教授の解説に、逐次通訳を付けることにより、より多くの参加者を集めることができた。



■「オペラ/音楽劇の総合的研究」プロジェクト(通称:オペラ研究会)

このプロジェクトでは、オペラという総合芸術の研究を、演劇学と音楽学の両方の観点から行っている。まず4月の月例研究会(4月15日18:30~20:30、8号館303会議室)では、ヨーアヒム・ルケージーGCOE客員教授に1920年代の音楽劇の諸相を、英語によりレクチャーして頂いた。5月には、ヴァーグナー『ニュルンベルクのマイスタージンガー』の一部を上映し、その筋書きにおける主役と脇役の位置関係を倒置することにより、主人公ザックスの行為の意味付けを再検討した(5月20日18:30~20:30、8号館312、発表者・大山浩太)。6月には、GCOE事業推進担当者の丸本隆教授(法学学術院)により、ベルリンにおけるオペラ研究の現状に関する報告があった(6月3日18:30~20:30、8号館312)。なお、オペラ研究会は、グローバルCOEの前身である21世紀COEにおける研究の成果を、『初期オペラの研究』(彩流社、2005年)として公刊し、その続編となる研究書の発行を期して準備中である。

■GCOE英語ゼミ

講師:ギャヴィン・ダフィ(客員講師)
 日時・場所:毎週木曜日 18:00~19:30
 演劇映像専修室2(33-2号館2階215)

研究活動に必須の英語をスキルアップするために、今年度はGCOE英語ゼミが行われている。受講生の専攻は多彩であり、各自が、単に英語を学ぶことにとどまらず、英語でのコミュニケーションの際に陥りやすい誤解を、「英語圏と日本の文化背景の差」を踏まえて把握し、より円滑で誤解のないコミュニケーション方法を学んでいる。目的のはっきりした整理された講義と、ユーモアを交えた会話によって、英語の苦手な受講生にも参加しやすいゼミとなっている。

(客員研究助手 鈴木辰一・村瀬民子)

東洋演劇研究コース

活 動 報 告

東洋演劇研究コースでは 2007 年度末から 2008 年度前半にかけ、日本に滞在中の中国・台湾の演劇研究者による特別講義を下記の通り実施した。

■「中国話劇百周年記念期間における創作と上演の状況」

講師：劉平氏(中国社会科学院文学研究所研究員)

2008 年 2 月 17 日(月) 14:00 ~ 15:30 早稲田大学早稲田キャンパス 26 号館 301 会議室

話劇百周年にあたる 2007 年、北京で第 5 回話劇優秀作品コンクールが開催された。そのコンクールで審査員を務めた講師が、上演された話劇 30 数作品の中から特に 7 作品を取り上げ、近年の作品傾向や話劇公演の現状について紹介された。北京など大都市における民営劇団の台頭や観客層の分化など、興味深い指摘が多かった。

■「巴蜀芸術団—中国最初の民営劇団について」

講師：張中学氏(巴蜀芸術団団長・元四川省川劇院院長)

2008 年 2 月 17 日(月) 15:30 ~ 17:00 早稲田大学早稲田キャンパス 26 号館 301 会議室

元四川省川劇院院長で脚本家でもある講師が設立した、中華人民共和国成立以後最初の民営劇団である巴蜀芸術団の 20 年に及ぶ軌跡、現在の公演状況及び今後の在り方についてお話し頂いた。同劇団の設立から現在までの軌跡は 1980 年代以降の中国演劇の実状を理解する上で大変示唆的であり、中国における民営劇団の実態に関し知見を広めることができた。

■「建国後の革命史を題材にした話劇と“样板戯”」

講師：劉平氏(中国社会科学院文学研究所研究員)

2008 年 5 月 17 日(土) 14:00 ~ 17:00 早稲田大学早稲田キャンパス 6 号館 314 教室

文化大革命期に“样板戯”(革命模範劇)に認定された諸作品、及び革命を題材とした話劇作品を、“样板戯”の全盛期を同時代的に体験された講師が、演劇学の観点から実証的に考察された。質疑応答では、特に現在の観衆に“样板戯”がどう受容されているかにつき活発な議論がなされた。

■「劇場、文献研究、フィールドワーク—演劇研究方法論」

講師：邱坤良氏(台北芸術大学教授)

2008 年 6 月 28 日(土) 15:20 ~ 17:20 早稲田大学早稲田キャンパス 6 号館 318 教室

台北芸術大学校長や行政院文化建設委員会主任委員等を歴任され、現在の台湾を代表する演劇研究者の一人である講師が、日本統治期台湾の新劇に関する研究等、これまでの多岐にわたる研究成果を踏まえ、演劇研究の方法論に関する問題提起を行われた。

(客員研究助手 森平崇文)



舞踊研究コース

活 動 報 告

GCOE舞踊研究コースでは、前年度の「舞踊研究の現在—理論研究と分析研究の交錯地点をズームアップする」というテーマに引き続き、今年度は「現代舞踊プロジェクト」と「古典舞踊プロジェクト」を推進する中、5月15日から17日までの3日間、スーザン・レイ・フォスター氏を招聘して、「アメリカにおける舞踊学の現状」をテーマとした研究会を開催した。コメンテーター鈴木 晶氏(法政大学教授・GCOE客員講師)、ディスカッサント石井達朗氏(慶應大学教授・GCOE客員講師)。

スーザン・レイ・フォスター氏(UCLA教授)は、多数の著書を通して、世界の舞踊学に多大な影響を与え続けている舞踊学研究の第1人者であり、優れた教育者、振付家でもある。

第1日(5月15日)「Choreographyという用語の歴史」

フォスター氏は、“Choreography”という用語を歴史的に読み解き、「Choreography as Documenting」(18C—19C)、「Choreography as Testifyng」(1930年代—1950年代)、「Choreography as Making」(1960年代—1970年代)、「Choreography as Collaborating」(1980年代以降—)の4つに区分。その区分根拠の理由と各々の“Choreography”の意味についての考察結果を論じられ、舞踊学研究方法を具体的に示唆される貴重な講演であった。

第2日(5月16日)「Choreographyとアメリカにおける舞踊学研究の現状」

この日の講演では、アメリカにおける舞踊学研究がこれまでどのような視点、どのような方法で為されてきたのか、為されているのかについて、具体的な事例をもとに解説された。中でも、自身の著書*Reading Dancing*(1986)にあるように、1980年代から人類学、ジェンダー、セクシュアリティ、カルチュラル・スタディーズ、ポスト・コロニアリズム、言語学などの諸視点から、“社会的・文化的価値観に影響を受けた舞踊”研究が試行されるようになり、現在さらに深化しているという指摘は非常に興味深いものであった。

第3日(5月17日)「GCOE研究員との対話」

舞踊研究コースの研究員達が各自の研究テーマと進捗状況及び問題点を英語で発表し、フォスター氏から質疑応答形式で助言を受けるといった研究交流が行われた。フォスター氏は日本の若手研究者との交流を喜ばれるとともに、今後の成果に大いなる期待を示され、名残を惜しんでの閉会となった。尚、今回の研究会は、他大学教員、舞踊研究者・批評家、他大学舞踊専攻生も含め延べ120名余が参加し、有意義な交流が行われた。

(客員研究助手 崔 柄珠)



『入門・現代ハリウッド映画講義』（藤井仁子編 人文書院 2008年3月発行）

編者以下6名の映画研究者（碓井みちこ・グローバルCOE研究員を含む）による書き下ろし論文と一つの翻訳論文から成る。『スパイダーマン』『ロード・オブ・ザ・リング』『ファイト・クラブ』といった1990年代以降に製作されたハリウッド映画の詳細な分析を通して、デジタル技術の導入、DVDの普及など、現代の映画が経験している未曾有の地殻変動を明らかにすべく努めた。議論の過程では、ジャンル、ポスト古典的ハリウッド映画、インデックス性、パステイシュといったおなじみの諸概念が再審に付される。同時にブックガイド、用語解説、索引を充実させ、初学者が映画学の基本を学べるようにも配慮した。編者が担当する「現代映画論」（文化構想学部）他の授業で教科書・参考書に指定されている。

（事業推進担当者 藤井仁子）

EVENT
CALENDAR

◆2008年度第一回博士論文成果報告会

開催日：2008年7月19日(土) 13:00～17:00 会 場：早稲田キャンパス26号館3階302会議室

- ① 13:00～14:10 李 墨 (2008年度グローバルCOE客員講師)
タイトル：歌舞伎「一谷嫩軍記」の研究 (提出先：早稲田大学)
- ② 14:20～15:30 大塚 直 (2008年度グローバルCOE研究員)
タイトル：ボート・シュトラウスの演劇－メディア時代の人間学 (提出先：東京外国語大学)
- ③ 15:40～16:50 山梨牧子 (2008年度グローバルCOE研究員)
タイトル：A Kaleidoscopic Portrait of *Takarazuka* Modernity and Aesthetics in the All-female Japanese Theatre since 1914 (提出先：イギリス・エディンバラ大学)

◆シェイクスピア・ゼミ講演会

GCOE西洋演劇研究コースシェイクスピア・ゼミでは、2008年9月20日、25日に、パリ第3大学教授のフランソワ・ラロック氏をお招きし、講演会を行う予定です。

◆国際研究集会「60年代演劇再考」

会 期：10月17日(金)～19日(日) 会 場：10月17日小野記念講堂、18日国際会議場、19日大隈講堂

演劇博物館グローバルCOEでは、10月17日～19日の3日間にわたって、国際研究集会「60年代演劇再考」を開催します。仏5月革命が起きた1968年から早や四十年。当時、世界同時多発的に起きた演劇運動は今日の現代演劇の礎を築いたといっても過言ではないほど、演劇史上に大きな転換をもたらしたとされています。しかしながら、60年代演劇は神格化される一方で、当事者はいったい何を目指したのか、また、後世の演劇人の目にはどのように映ったのかといった具体的検証はこれまで積極的になされてきませんでした。そこで本研究集会では、60年代演劇を多角的・具体的に考察すべく様々な講演やシンポジウムを設けます。まず日本の60年代演劇といえば欠かすことのできない著名な演劇人および、若手の演劇人をお招きしてのシンポジウムやパネルディスカッションを行います。海外からはラ・ママ実験劇場主催者エレン・スチュアート氏を招聘する予定です。また、この三日間以外にも、日本近現代演劇研究者ディヴィッド・グッドマン氏による連続セミナーと、アングラ演劇ポスター展を開催する予定です。ぜひ足をお運びください。

◆2007年度紀要発刊のお知らせ (2008年3月発行)

演劇博物館グローバルCOE紀要 演劇映像学2007 第1集、第2集、第3集

ご希望の方には送料のみご負担いただく形でお分けしています。問い合わせ先：tel.03-5286-8110 gcoe-enpaku-office@list.waseda.jp

編集後記 暑中お見舞い申し上げます。

昨年からはじめたグローバルCOEプログラムは、新年度にはいり、ますますパワーアップ。全力疾走を続けています。このプログラムによって現実のものとなる、研究会、講演会、シンポジウムなどの構想の数々は、実に多彩かつダイナミックであり、実現の過程で、研究者間に多様なネットワークを構築しています。なかでも、特集記事でとりあげた舞台公演を合わせて開催する試みなどは、演博GCOEならではの企画と言えるでしょう。編集を担当した研究助手は、各コースの活動を限られた紙幅の中でいかに紹介するかに苦心しました。また、こうした活動が、GCOE事務局をはじめとする多くの方の地道な努力によって支えられていることも、紙面に表せない大事な部分です。GCOEの活動状況については、どうぞウェブサイトも併せてごらんください。

(芸術文化環境研究コース客員研究助手 長嶋由紀子)